

〔翻 訳〕

『スペクテイター』 (38)

——第352号から第361号——

門 田 俊 夫

第352号 1712年4月14日（月曜日）

【スティール】

もし我々が生まれながらの正直者であれば、正直のみが求められ、
きつと、ほかの何にもまして、正直であろうとすることで
大きな重圧がかかってくる。(キケロ)¹⁾

ウィル・ハニコームは昨日、私に向かって、近年町の人々の会話が大幅変化したと不満を述べていました。つまり、立派な紳士がどんな風に口火をきいたらよいか途方に暮れ、また、出会う人たちとの話に入って行けないということでした。現在、この世には、これまでいかなる諷刺家も道徳家も触れたことがない、まったく新手の悪がひそんでいるのだ、とウィルは言います。彼が言うには、人々がこんなにたやすくならず者になるのは天地創造以来初めてのことだということです。前世紀の悲劇を読めば、それまで長年に渡って培われた、若者の喜びや突飛な行為を超えた策士や狡猾な人物が登場します。だが、現在では、若者が老人の悪徳を取り込んでおり、弱冠25歳にして、悪賢く、不誠実で、策を弄し、人を出し抜き、騙し、欺いても、良心の呵責を覚えない若者が誕生しているのだ、とウィルは言います。わが友は、チャールズ王の治世が終わる頃までは、40歳以下で際立ったならず者はいなかったのだと付け加えます。最近では、話題といえば、方法を度外視して、どうしたら幸運が舞い込むかといったことばかりなのです。こればかりがはびこっていますので、若者は率直で、素朴で、本当に大切なことはすべてないがしろにしてしまいます。そして、内心では自分たちには真の名誉とか誠実さには無縁であると認めて、実態よりもっとひどいことになってしまいます。誠実であれば見下すはずの目的が気に掛かって、目的達成のために手練手管を労することになります。こういったことはすべて、一般に流布している目的達成の能力が評価されるのだという極めて愚かな思い上がりのせいなのです。要するに、浅薄で未熟な人たちは短命の手際のよさに酔いしれるわけです。術策の仮面を被った愚行が無思慮に与えるさまざまな表情について述べる前に、私としては、人の幸運と利益に対しても永続的な好結果をもたらすのは、真実と率直さにほかならないのだ

1) キケロ『義務論』3.8.35

とだけ言っておきたいと思います。

真実、真理というものは何ものにも優ります²⁾。何か善なるものを示せと言われれば、私は誠実さに優るものはないものと確信しています。人が偽る、つまり、実際とは違ったように見せようとするのは、ひとえに、その方がいいと考えるからにほかなりません。装う、つまり、偽ることは、優越さの仮面を被ることにほかなりません。ひとかどの人物に見せようとする最善の方法は、実際にその人物になりきることです。優れた資質を持っているふりをするとは、実際に持つと同じくらい厄介なことです。実際に持っていないければ、十中八九露見してしまい、持っているふりをする労力はすべて徒労に終わります。絵画の場合、目利きなら簡単に識別できる本来の長所と気質とは異なる何か不自然なものが見えてきます。

長い間、ひとつの役になりきることは難しいことです。根底に真実が横たわっていない場合には、自然が常に復帰しようとし、いずれ地金が出て来ることになります。それゆえ、立派に見せる方が都合がいいと考える人がいるなら、実際にそうさせてあげなさい。そうすれば、その人の善良さは誰の目にも満足がゆくように見えるでしょう。その場合、誠実さこそが真の知恵となるのです。とりわけ、世事に関しては、正直がまやかしや虚偽といったあらゆる手練手管よりも有利に働きます。世間を渡って行く上では、正直の方がはるかに分かりやすく、安全かつ確実です。もつれて込み入ったことになったり、危険で危ない目に会ったりすることも少なくなります。正直こそが、私たちを一直線に目的に進ませてくれ、長続きさせてくれる最短の道なのです。虚偽や狡猾というものは、絶えず無力なものとなり、それを行使する人にとっては、効力のない役立たずとなります。一方、正直は行使することで増強され、長い間行使すればするだけ、その人にとってそれだけ大きな効力を発揮します。そして、その人の名声は高まり、関係者の間には、大きな信頼と信用が生まれます。これは人生において言葉に表せない強みとなります。

真実は常にそれ自体首尾一貫しており、手助けは一切必要ありません。真実は常に手元にあり、口元で控え、意識しないうちに口からもれ出ようとしています。一方、嘘は厄介な代物で、ひどく苦しんで作り話をさせることになります。そして、あることを誤魔化し通そうとすれば、さらに多くの誤魔化しをし続けなくてはなりません。これはまるでそれを支えるために絶えず補強を必要とする見せ掛けの基礎の上に建てられたビルのようなものです。そのため、最終的には、最初に本物のしっかりした基礎の上に丈夫なビルを建てるよりも、もっと多くの負担が掛かってくることになります。なぜなら、誠実さは確固としたもので実体が伴い、そこには空虚で不安定なものは何一つないからです。誠実さは単純明快ですので、狡猾な人物が絶えず危険にさらされ、露見されるのではないかびくびくする必要はありません。狡猾な人物が自分はいしろめたい生活をしているのだと思っていると、見せ掛けはすべて透けて見えるようになり、周りの人に読み取られてしまいます。

2) この箇所以降は、ティロットソンの説教から取られている。ジョン・ティロットソン（1630-1694）は、名説教をしたことで有名であり、1691-1694年までカンタベリー大主教を務めた。

狡猾な人物は自分の正体が見破られるとは思っていません。他人をかつぐのが当然と思っている間に、自分を笑い者に行っている訳です。

以上のことに加えて、誠実さは最も簡潔な知恵であり、仕事の迅速な処理にとって優れた道具となります。誠実は相手方を信頼させ、あれこれ腐心する必要はなく、ほんの少しの言葉で物事に決着をつけることができます。これは平板な道を旅するようなもので、しばしば道に迷ってしまう横道に行くよりも早く目的地に到着します。要するに、偽りやまやかしいはいかに重宝に思えても、すぐに化けの皮がはがれてしまうのです。この不都合はどこまでも続きます。なぜなら、いつ終わるとも思えない怨恨と疑惑を生み出すからです。その結果、真実を口にしても信じて貰えず、おそらく正直に言っても信用されることはありません。いったん、誠実という評判を失ってしまいますと、その評判が定着し、真実や偽り、何をもってしても、不動のものとなってしまいます。

不実な人々に対しては、神は大いなる知恵の中で、世事に対しても持つ真実と誠意の素晴らしい利点を隠されたのではないかと私は思っています。不実な人は貪欲と野望で目が眩んでおり、目先の利益のことしか目に入らず、あまりにも直截的な方法ですが、利益にしがみ付かざるを得ないのです。確固とした誠実さがもたらす遠い将来の結果や最終的に訪れる大きな恩恵や利益に関しては、不実な人には見通すことができません。この種の人物がその愚に気づくくらい賢明で先見の目がありさえすれば、彼らは正直になり、誤魔化しはしなくなり、誠実と美德を愛するようになります。そして、巧妙な考えでもっと効果的に自らの利益を高めることとなります。それゆえ、神の摂理によって、悪人が公正で正直な人たちと対等の間柄になり、正直で正当な方法で彼らの邪悪な企て実らせないようにするために、知恵の最も肝心な点を隠して彼らの目に留まらないようにしておられるのです。

実際には、一日だけのお付き合いで、それ以上人々と交際することがなく、人々の考えを聞く必要もない場合には、世情について語るとき、その場限りでやり過ごしたとしても大きな問題にはなりません。ところが、長いお付き合いをして行く場合には、言動には真実と誠実を込めなくてはなりません。なぜなら、長続きし、長持ちするのはこれ以外にはないからです。これ以外のあらゆる術策は失敗しますが、真実と正直は最後までその威力を発揮するのです。

第353号 1712年4月15日(火曜日)

【バジエル】

謙虚なテーマを扱うことは大切だ。(ウエルギリウス)¹⁾

教育論を展開し、世間一般、とりわけ私を喜ばせてくれます紳士から、つい最近、つぎの手紙を頂きました。

1) ウェルギリウス『農耕詩』4.6

拝啓

失礼をも省みず、若者の教育について4度目のお手紙を差し上げます²⁾。私はこれまで若者に早くから美德を教え込むために、通常の修練と両立させるのが適切だと考えたある特定の課題に関する私の考えをお伝えしました。そこで今回は、若者を社会にきちんと向き合わせ、立身出世につながると思える方法をいくつかお伝えしたいと考えます。

私の考えでは、学問の目的は、心地よい伴侶を作り、快く孤独に耐える方法を教えるか、生まれながらの資産家でない場合には、その不足の埋め合わせをし、資産を獲得する手段を提供するかのいずれかです。前者の目的で学問に精を出す人物は、装飾として学問をすると言えるかもしれません。一方、後者の目的で学問する場合は、実際に有効活用するためです。一方は財産を築くためであり、他方はすでに所有している財産を際立たせるためなのです。ところで、大多数は後者つまり生まれながらにして資産家ではない階級に属しますので、ここでは、学問によって立身出世を期待している人たちのための方法を提案したいと考えます。資産獲得の多くは並外れた功績ではなく、取るに足らない功績による方が多いのだということが前提になると思います。世間の目で最も偉大な人物となる資質は、必ずしもそれ自体有益であることもなく、持ち主に有利に働くわけでもありません。

最初から光り輝く類稀な才能をもった詩人はごく稀ですので、天分を備えた数限りない詩人が才能を発揮する機会も持たずに、社会から消えてしまいます。だが一方、並みの才能を備えた人物は日々の生活において自分たちの能力にふさわしい出来事に遭遇します。

私は、以前学友であり、それ以来親友となっている二人の人物を知っています³⁾。一方は学校でどうしようもないぐずと考えられただけでなく、大学でもそれで通っていました。他方は先生の自慢の種で、大学では超有名人でした。天才は今では年160ポンドで田舎の牧師館で埋もれていますが、辛うじて公証人の能力を備えているもう一方は10万ポンドを超す資産を所有しているのです。

私が思いますに、自分の息子には大きな才能が備わってしかるべきだと思っているかどうかは別にして、多くの裕福な人々にとって、私の言っていることは疑わしく思えることでしょうが、何か際立った才能が授けられていない若者にそれなりの教育を施すことほど馬鹿げたことはないとは私は確信します。

それゆえ、わが国のグラマー・スクールの欠陥は、全員に天才の作品を強要することです。大多数の少年にとっては、そういった天才の作品に精通する必要はなく、人生において役立つほんのちょっとした実用的な知識の方がはるかに有益なのです。

たとえば、実用幾何学などがそうです。私は窓に日時計を刻んで、国務大臣と親交を結んだ人物のことを知っています。また、ある方法で郷土の身辺整理をし、地所の正確な測定をして、イングランド西部地区で最高の聖職禄を手にした牧師のことを覚えています。

このテーマについて考えるとき、私としては人生のあらゆる段階で役立ち、すべての先

2) 第307号、第313号、第337号参照。

3) ニコルスによると、この2人はスウィフトとハンプルグの商人フランシス・ストラットフォードとのことで、キルケニー、トリニティ・コレッジを通して級友だったとのこと。

生が生徒に教えるべきだと思える点について触れざるを得ません。私の言いたいのは、手紙の書き方のことです。そのためには、少年たちをラテン語の書簡やテーマや韻文で悩まさないで、少年同士で時間を厳守した手紙のやりとりをさせるのです。何か架空の仕事をやらせたり、場合によっては少年同士の空想の世界に浸らせたりして、どんなに些細なことでも互いに手紙でやりとりをさせ、相手の手紙に決められた時間できちんと返事を書かせるのです。

大多数の少年にとっては、大人になった時、先生たちが7年ないし8年で教えるギリシア語やラテン語よりも、これを習慣化した方が役立つのだと断言できると私は思います。

多くの学識者にこのことが不足しているのは明白です。彼らはデモステネスやキケロの文体を褒め称えているのですが、ごくありふれた出来事で自分の考えを述べる言葉が欠けているのです。

私はあるラテン語の雄弁家の手紙を読んだことがあります、ごく普通の事務弁護士が読んで失笑を買うようなものでした。

書き方という項目では、労せずして習得でき、まさに私が推奨しています技術である報告書と速記について無視するわけにはいきません。

おそらく皆さんは、私がこれまで主として生まれながらにして備わっている才能がそれほどでもなく、したがって、優れた学問には向いていない少年たちのことを言ってきたのだと思われるに違いありません。だが、これは天才的な若者も時として、いわば才能の先駆者になり、世間に売り込むためには、こういった取るに足らないことを習得しておくべきだと断定しても差し支えないものと信じます。

歴史を振り返って見ますと、大きな能力を備えていたが、些細な功績を挙げることによって、巧みに偉人の好意に取り入らざるを得なかった人物の例がふんだんにあります。たとえば、わが国の現代喜劇の中には、完璧な紳士が画家とかダンス教師に扮して女性に言い寄る場面がありますが、これもそういった例の一つです。

差異は、天才的な若者の場合は、こういったことは、そうでない人の場合に不可欠の要素である幾多の功績に過ぎないという点なのです。一方はそれで気晴らしをしますが、他方はそれを獲得しようとするのです。要するに、こういった追加的な要素がほとんどない天才とコーランに明示された指示に従って、手工芸の習得を余儀なくされているスルタンに対して私は同じ見方をするのです。これにドイツの例を挙げれば十分だと思います。ドイツでは、数名の皇帝が同じようなことをしました。レオポルド1世は木工に力を注ぎました⁴⁾。見事に仕上げられた彼の木工品がウィーンに登場したそうです。そこで、ヨーロッパの優れた指物師たちは、自分たちの職業に恥辱を感じることなく、彼の作品を認めることになったのです。

私は天才的な若者が頂点にまで上り詰めることに異議を唱えているわけではありません。私が本稿で言いたかったことは、たとえ能力に恵まれていなくても、学問を役立たせる方

4) レオポルド1世(1640-1705)は、1658-1705年まで神聖ローマ帝国皇帝。

法があるということなのです。

敬具

第345号 1712年4月16日（水曜日）

【スティール】

そういった気取りをしていると美德に傷がつく。(ユヴェナリス)¹⁾

観察者殿

貴殿は何回かに渡って、卓越したご婦人方を「サル」とか「男たらし」だとかその他いろいろな言い方をなさっておられます²⁾。だが、私が思いますに、これまで「帰依者」といった言い方はなさっておられません。帰依者とは、あらゆる機会に無分別に時宜を得ずに美德を口にする事で、宗教の信用を落とす人たちのことを言います。帰依者は自分に疑いを抱く人は誰もいないと断言しますし、常に上機嫌で快活に振る舞います。帰依者は社会生活をしますし、決してそこからわき道にそれるようなことはしません。ただし、自分にとっては、あらゆることが退屈極まりないのだと明言します。教会へは必ず顔を出し、美德を発揮します。非常に熱心にお祈りを捧げますので、しばしばあえぎながらお祈りをしている様子を目にしたことさえあります。ほかの女性たちがダンスをしたり、「質問と命令」の遊びをしているときに³⁾、彼女は私室で声を出して読書をします。彼女は愛はすべて神聖なものでない限り馬鹿げているのだと言います。嫉妬には必ず軽蔑の気持が混在するからということで、人間同士が抱く熱情については非常に辛らつな見方をします。男性が女性に熱心に言い寄っているのを見かけるといつでも、神様に向かって、なんとたわめたことをあの愚か者は口にしているのでしょうか、礼拝の合図のベルは鳴りはしない、と声を上げます。わが国には、他の誰よりもこれを気晴らしとする傑出したご婦人がいます。彼女はベルをつけた髪のもじゃもじゃした子犬を抱きかかえることも、リスやヤマネをポケットに忍ばせることもありません⁴⁾。そのかわりに、彼女は人の眼につくときにはいつも道徳本の簡約版を携えています。(正直言って、上流階級の人たちが奨励した奇妙な娯楽なのですが) 名高いロバのレース⁵⁾に出掛けた時でも、彼女は他のご婦人方と違って、哀れなロバのいななきに耳を傾けることはありませんし、走っている様子に目を向けることもありません。短髪の鬘と白い腰帯をつけた田舎の郷土が馬車の傍らで女性を口説き、なんと素敵な天気なのでしょうと語る声にも耳を傾けることはありません。この娯楽については彼女はつぎのように語るのです。自分がこのレースを見に来たのは、ひとえに、みなさんがお怪我をなさらないことを願ってのことなのです。そして、もし笑って相

1) ユヴェナリス『諷刺』6.168-9

2) 第209号、第247号参照。

3) 「質問と命令」は遊びのひとつ。第245号参照。

4) スティールの喜劇『弔い』(1701)。5幕2場で、ブランプトン夫人がリスのロビンの死を嘆く。

5) クリステイナ・ホール『イギリスのスポーツと気晴らし』(1949) 参照。

好を崩しておられる方がいらしたら、元の表情に戻っていただきたいからです。彼女はお茶を飲みながらおしゃべりをする事もなく、顔を伏せます。そして、食事の前には射祷を捧げます。このようなこれ見よがしの振舞いは、真の神聖さとは受け入れがたく、神聖さの信用を落とし、美德を無愛想なものにするだけでなく、滑稽なものにしてしまいます。聖書にはこの種の振舞いを忌み嫌う描写がふんだんに登場します。帰依者は善良さを奨励するにはほど遠い存在であり、彼女を見ていると他の人々は尻込みしてしまいます。こういった婦人の愚行と虚栄は、まるで牧師の悪徳と変わりません。牧師の悪徳は自らの品位を落とすだけでなく、軽率な人々に信仰に対する誤った考えを持たせることになります。

敬具

ホットスパー

観察者殿

クセノフォンは、スパルタ共和国に関する簡単な解説の中で、若者たちの振舞いについてつぎのように語ります。彼らの表情には大層節度があるので、大理石の彫像の目を向けることになる、また、振舞いには初夜のベッドに横になる新婦よりも控え目なところがある。こういった美德は雅量と結びついて、精神力に大きな影響を与え、戦いでは敵方はその顔を直視できず、お国のために死を迎えざるを得なかったのだと⁶⁾。

私はロンドンやウェストミンスターの街中を歩いていて、出会う若者たちの顔つきを見るといつでも、ここがスパルタだったらいいのに考えてしまいます。私が見かける若者たちの表情にはどう見ても威張り散らした雰囲気や高圧的な態度しか見えません。そのため、うわべしか見えない人なら、彼らの勇気はかのギリシア人たちよりも優っているのだ映るに違いありません。私は十二分に思索を重ねましたので、目が何を語っているか分かります。このことは、私が知恵によって老齡者の持つ基準を修正していなかったとしたら、大きな不幸となっているに違いありません。赤いコートを羽織った若者はほぼ全員、自信たっぷり、自分は勇敢なのだと語っているわけです。そのうちの何名かは心の中で、私のことを変わった人物だと思っています。街のあちこちで、馬鹿にしたような表情とか眉をひそめるとか威張りくさって鼻をつんとしたりするといった様々な人を見下した仕草を見掛けます。徒弟は指を突き出して、荷物運搬人は舌を出して、軽蔑していることを示します。地方の紳士が建築物や看板や時計や馬車や時計を少し好奇心をそそられて見ていると、こういった物をよく知っている町の野次馬たちはその紳士の質朴さを馬鹿にしてしまいます。頭に荷物を載せた人物が荷物から手を離し、後にいる従者の帽子の縁を茶目っ気たっぷりにいじるのです。腹を立てた相手がののしったり、あわてふためいていると、通りにいるひょうきん者たち全員が、ちょっかいを出した無邪気な腕白者と頭に注意を払っていなかった人物の愚かさを喝采してにやりとしています。こういったことは、総じて、粹がったり、機転を利かしたり、勇敢ぶったりすることに起因します。ウィッチャリーは、

6) 「スパルタの政策について」

ある人物に、赤い半ズボンはある種勇敢さのしるしだと語らせることによって、こういった自惚れを揶揄しています⁷⁾。また、オトウェイは、機敏さを鼻にかけ、松葉杖をついた乞食を転倒させる人物を登場させます⁸⁾。以上のことから、私はこのテーマについて思索をめぐらして欲しいものと考えます。一方、私は私自身を守るために、ひ弱な老人の持てる力を十二分に発揮したいと考えます。誠実な人間を追求するディオゲネスは、白昼にランタンとローソクを要求しました⁹⁾。そこで、私は今後は通りを歩く時には凸面のクリスタルがついた薄黒いランタンを手にする積もりです。そして、もし誰かが私をじろじろ見るようなことがあれば、堂々とその目に直接光を差し向け警告を発したいと思います。慎重な若者を見つけることに絶望的になっている私は、こうすることで若者の生意気な態度を避けたいと思っている次第です。

敬具

ソフロスニウス

第355号 1712年4月17日（木曜日）

【アディソン】

私の書くこの詩で傷つくものは誰一人いない。（オウィディウス）¹⁾

私の仕事をけなしたり、私のことを非難したりする人たちの悪口を書きたい気になることは数限りなくあります。だが、いつもその憤慨を抑えることができていることを嬉しく思っています。かつて、途中まで書きかけたことがありましたが、厳しく当たろうとした当人に慈悲をかけるべきだという気持ちが募ってききましたので、最後まで書かずにその原稿を火にくべてしまいました。腹を立てていくつかのささやかな警句や諷刺文を書き、一兩日それを読み返して感心した後に、これも同じく燃やしたこともあります。これらは慈悲へのいけにえであり、短気な振舞い抑えることによって、もし公表していたら得られる評判や敵方に与える屈辱感から得る満足感よりも大きなものを獲得したのです。文才があれば、中傷や非難が発せられる時と同じような激しい気持を持ちながら、それに応じるのを我慢することは高尚な心持ちとなります。だが、敵方にしっぺ返しをするのに四苦八苦しながら、復讐の道具を手にするときには、憤怒の気持を断ち、それを鎮めることは偉大で英雄的な行為のように思えます。このようにして敵を許すことには特別な美点があります。そして、攻撃が激しく正当性に欠いていればいるだけ、これを許す人物の美点はより大きなものとなります。

私は、見事な筆致で満足行く考察としてはエピクテトスに優るものはないと考えます。そこでは敵方に新たな視点を当て、私たちが一般的に抱く見方とは全く異なった視点を提

7) ウィリアム・ウィッチャリー（1640-1716）『率直な男』（1676）。

8) トマス・オトウェイ（1652-1685）『上流階級の人たちの友情』（1678）。

9) デイオゲネス・ラエルティオス、6.41

1) オウィディウス『悲嘆の詩』2.563

供してくれます²⁾。その趣旨はつぎの通りです。人はあなたが傲慢とか意地悪いとか、嫉妬深いとか思い上がっているとか、無知だとか誹謗しているとかということで、非難するか。非難が当たっているかどうか自分で考えてみなさい。もし当たっていなければ、非難の対象は自分ではないのです。その人は架空の人物を非難しているのであって、おそらく、あなたの見た目を憎んでいても、本当のあなたの姿を愛しているのです。もしその非難が当たっていれば、もしあなたが嫉妬深い意地悪な人物であれば、その人物はあなたのことをそのように考え、あなたに対する見方を変え、穏やかに愛想よく親切になり、あなたへの非難は自然になくなって来ます。実際にはその人の非難は続くことがあるかも知れませんが、非難している相手はもはやあなたではありません。

私はしばしば以上のルールを自分に当てはめます。そして、私に狙いを当てた風刺的な言葉や文章を見聞きしますと、その通りかどうか自問します。私への評決が下されると、今後のために、私が非難された点の修正に努めます。だが、全く根拠がない場合には、それ以上思い悩まず、私の名前は架空の人物を登場させるために、その非難の書き手が利用した虚構の名前に過ぎないのだと見なします。自責の念に駆られない人は、一切非難を気にかける必要はありません。つまり、罪を犯していないと分かっている場合は、罰を受ける必要はないのです。これは不屈の精神なのであり、潔白であればこの気持を持てます。この精神がなければ、勝手気ままが飛び交っている国では、心穏やかに生きていくことはできません。

著名なバルザック氏は、自分を非難する書物の出版を差し止めたことのある大法官宛の手紙で、この著者の精神の高潔さを生き生きと物語るつぎのような言葉を書き記しています³⁾。「初めてのことなら、おそらく私を罵倒する誹毀文書を駆除することで満足するかもしれませんが、ささやかなコレクションが作れるくらいたっぷりある場合は、私なら心密かにその数が増えて行き、私に何の害も加えることのない妬みによって投げ掛けられる石の山を見て喜びを見出します。」

バルザック氏はここで、東方の国々の塔のことをほのめかしています。この塔とは、通りかかった旅行者が亡骸の上に一つずつ積み上げて出来た石の山のことです。確かに、このようにして妬みによって積み上げられた記念碑ほど輝かしいものはありません。私自身は、機知を発揮して見事に諷刺でもってやり返すよりも、憤慨せずに不当な非難に耐えられる気質を備えた著者に軍配を上げます。

本紙を非難している人々に対して、きちんとした弁明をしない方が適切だと考えている理由は、以上の通りです。もう一言付け加えますと、私の仕事は私的な熟考や議論がふんだんに盛り込まれていたとしても、世間の人々にとってはほとんど有益なものにはなっていないことに違いありません。そのため、妬みや無知から発せられるあらゆる捜しには目を向けたことはありません。世間で認められたことを攻撃する以外には注目されることがない

2) エピクテトス『便覧』42。エピクテトスはストア派の哲学者で、自己犠牲と博愛を説いた。

3) ジャン・ルイ・ゲ・ド・バルザック (1597-1654) は、アカデミー・フランセーズの創立会員の一人。当時の大法官はピエール・セギエ (1588-1672)。

へば文士たちが、私を同列に置いていたとしたら、十分私の対象となっていたに違いありません。

締め括るに当たって、ボッカリーニの旅人の寓話を引き合いに出したいと思います。ギリギリスの鳴声に悩まされた旅人は、怒りを募らせて馬から降りて一匹残らず殺したとのことです。著者によれば、この旅人は何の意味もないことで苦しんだのだ、つまり、ギリギリスを無視して旅を続けていても、この厄介な昆虫の寿命ははあと数日のことだったのであり、何一つ苦しむ必要はなかったのだから、ということです。

第356号 1712年4月18日（金曜日）

【ステイール】

神々はあなたにまたとない知恵が宿ることをお認めになさる
 だろう。善良さ高潔さで神々に勝るものはいない。私たち人間は
 その半分でも自分を愛せたらいいのだが。(ユヴェナリス)¹⁾

人間に求められる最も気高い行為が栄光と幸福だと認められないのは、高慢、内心密かに気取っているある種の自立自存にその原因があります。心が裏切り、名誉ある立派な行為への最も名誉ある誘因として存在する信仰心を受け入れるだけの考えに至らないのです。自らをおだてて信仰するのは、生まれつき備えている私たちの弱点です。心に秘めた思いを問ひ質してみると、自己愛とか虚栄心には全く無関心で無縁であることが分かります。しかしながら、表面的な偉大さを追い求める気持があるために、将来のことを考えずに、それ自体気高い動機がないと何か行うことは沽券に関わると思うかもしれません。もっと厳密に考えて見ると、立派な行為をして、来世での報いを期待することは、人間が到達できるひとつの高潔な美德だということが分かります。私たちの行為の主旨に神の目に満足に映りたいという気持以外の動機が入り込む場合には、必然的に、順境にあっても有頂天になり過ぎることなく、逆境にあっても落胆し過ぎないとしたら、私たちは人間以上の存在になる必要があります。ところで、キリスト教世界には統率者がいて、その方の生命と苦難を思い出すと、苦しみの中での慰めが分かりますし、その方の全知全能を知りますと、順境の中での屈辱が分かります。

考えの浅い人々が、偽善者の忌まわしい振舞いだけでなく、信仰に従っていると考えるときに、人を寄せ付けないうじけた気持で振る舞うために、キリスト教徒という言葉から、偉大、立派、好意的、寛大、そして高潔といったことが抜け落ちるのです。死後まで立派な行為の報いを保留し、しまっておくことができ、憎しみを許すことができ、中傷者にやさしく接することができ、友人に腹を立てることもなく、敵に復讐もしない人は、確実に社会のためになります。だが、こういったことは英雄的な美德とはほど遠いことで、キリスト教徒としての平凡な義務を果たしているに過ぎません。

1) ユヴェナリス『諷刺』10.349-50

確固とした信仰心を備えた人が、本日起きた受難を振り返って見ますと²⁾、心が張り裂けんばかりに、救い主の命と受難に思いを馳せるに違いありません。救い主の死の苦しみを思うと、浮気女に気を取られ、むなしい浮世にうつつを抜かし、現在心をうずかせている悲しみの原因であるこれまではかない喜びを思うがあまり、救い主の死の苦しみを忘れていたことに涙を流すに違いありません。

わが全知全能の統率者が私たちを神の家へとお導きになられるときの控え目な歩み方を考えますと大変満ち足りた気持ちになります。平易で適切な寓話、比喩や寓喩でもって、わが師は救済の教えを強調されました。だが、わが師のことを知っている人たちは、それを受け入れず、自分たちよりも賢明であることを知らされて立腹したのです。彼らは師をやりこめる考えを思いつくことができず、畏敬の念を起こさせるでもなく、立派にも見えない彼が自分たちよりも高尚なところがあるとは思いつきませんでした。そこで、わが師は彼らの狭量でさもしい考えをやりこめる力を振るっても無益と考えられたのです。

大勢の人たちが彼の後をついてまわり、彼の元に口の利けない人、目の見えない人、病人、手足の不自由な人を連れて来ました。救い主が彼らに手を触れると、彼らは蘇り、目が見え、喋り、飛び跳ね、走ったのです。彼を慕い、彼の行為に驚嘆した群衆は彼の元を離れることはできず、彼に付き従ったのです。その結果、救いの手を求める彼らは卒倒し、感情が抑えられないほどになってしまいました。創造主は彼らに同情し、奇跡によって彼らの要求を充たしてやりました。創造主の手に瞬く間に食物が増えていくさまを目にした彼らの喜びは言葉に尽くせません。羨むばかりの幸福感に包まれたのです。そうです、まるで節度をわきまえた食事、素敵な時間、無邪気な会話を統轄していないかのように、私は羨むと言うのです。

ところで、聖書の至る所にこれに劣らない奇跡がふんだんに盛り込まれています、そしてまた、神の御業を発揮する最中に、この世の王になるという考えはいささかも見せませんが、使徒たちはまだ世俗的な力、昇進、富、そして虚飾への希望を抱いているのです。野心を持っていたペテロは、師が自分の求める王国はこの世の王国ではないのだと聞いて、これまでずっと付き従ってきた師が、彼の予言した屈辱、恥辱、死を受け入れることに憤慨し、師のそでを引いて、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません。」³⁾と言ったのです。そう言ったペテロは師から厳しく叱責されたのです。そこには神というよりも人としての栄光が流れていたのです。

主が力と喜び以上のものに包まれ、勝利を誇示しないで、救い主としてエルサレムに公然と入って行くのがふさわしいとお考えになられたとき、状況は大きく変わり始めました。彼は謙虚に、おとなしく、控え目にやって来ました。群衆は新たな狂喜を覚えることもなく、彼の歩む道に上着やオリーブの枝を敷き詰め、「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ」⁴⁾と叫んだのです。この大いなる王が王座に就いたとき、

2) 本号は聖金曜日に発行された。

3) 『マタイによる福音書』第16章第22節。

4) 『マタイによる福音書』第21章第9節。

人々は爵位を授かりませんでしたでしたが救われたのです。犯罪は免除されませんでしたでしたが、罪は許されたのです。彼はメダルや名誉や恩典をお授けになられませんでしたでしたが、健康や喜びや視力や言葉を授けられたのです。目の見えない人が最初に目にしたのは、視力の生みの親でした。その一方で、足の不自由な人がその前を走り、口の利けない人がホサナを連呼しました。こうした人々に付き従われながら、彼は自らの家つまり祈りの家へとお入りになられました。そして、神の権威で持って、祈りの家を冒涇する商人や俗人を追い出されました。こうして、彼は不信心者たちに理解させるために、一度だけ、大きな専制的な力を行使なさったのです。それは利に走る世俗的な者に勝っているのだということを示すためだったのです。これは救世主なのか、救助者なのか。この無名のナザレ人がイスラエル人を支配し、ダビデの位に就くのか。世俗の愛と誇りに麻痺している高慢で尊大な人たちは、こんなに卑しい恩恵を施す人物を受け入れることはできず、憤慨し、彼の死を企んだのです。わが主は彼らの企みに気づき、自らの身に降りかかることを明確に語りながら、弟子たちにその心積もりをさせました。だが、ペテロは決断がつかず、興奮して、「たとい、みなの方があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」⁵⁾と激しく異議を唱えました。救世主の現世での最大の仕事は、私たちに、神の手助けがなければ、偉大なこと、善なることは何一つできないのだということを知らせることでした。そこで、彼は、勇気と忠実をよく思っているペテロに向かって、私は殺される、そして、あなたは一晚に三度私を知らないと言うでしょう、と告げられたのでした。

しかし、どのように考えたらいいのでしょうか。どんな言葉でもってその続きを語ったらいいのでしょうか。主はあそこで殴られ、馬鹿にされ、踏みつけられるのです。凶悪犯のごとく引き回されるのです。主であり、王であり、救世主であり、わが神である方をどこに連れて行くのでしょうか。主はまさしくあの不当な扱いの償いをするために死を迎えるのです。彼らは主であり生を授けてくれたあの方に釘を打つのです。主の傷口は黒ずみ、主の体はよじれ、心は憐憫と苦しみで波打つのです。なんと、全知全能の受難者は、勝利を喜ぶ不正から目をそらされます。主は顔を聖なる胸に向けています。主の呻き声に耳を傾けてご覧なさい。主が息を引き取られるお姿をご覧なさい。大地は震え慄き、神殿は引き裂かれ、岩は張り裂け、死者が眠りから眼を覚めます。どちらが生者でどちらが死者なのでしょう。自然の森羅万象は創造主と共に消滅していくのです。

第357号 1712年4月19日（土曜日）

【アディソン】

こんな話を聞いて、誰が涙を抑えることができませんよう。

(ウェルギリウス)¹⁾

5) 『マタイによる福音書』第26章第33節－第34節。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』2.6.8

『失樂園』第10巻は、ほかのどの巻よりも多くの人物が登場します。著者は、一連の出来事に決着をつけるさい、これに関わってきたすべての人物を登場させ、それぞれにどのような影響を与えたかを実に見事に描き出します。これは、登場人物全員が観客の前に引き出され、彼らに及ぼした行為の結末が明らかにされる完璧な悲劇の最終幕に似ています。

そこで、私は第10巻については、天国、地獄、人間、そして架空の人物といった4つの項目について考え、それぞれに割り当てられた役割を考察したいと思います。

まず、天界の人々から始めます。人間が罪を犯したとき、守護天使たちは警戒をしていたことを説明するために、天国に帰ります。彼らの帰還、彼らが悲しみを持って迎えられ様子、罪人の会話を聞いて喜ぶ様子などは、つぎの詩行に見事に描かれています。

守護天使たちは、人間のことを思って悲しみにくれながら、
黙々として樂園から天に向かって急遽翔けていった。
彼らは人間が陥った今の境遇をすでに知っていたからだが、
他方、どうやってあの狡猾な悪魔が誰からも見咎められることなく
樂園に忍び込んだのか、不思議に思えてならなかった。
この不幸な知らせが地上から天国の門に齎された時、
それを聞いた天使たちはすべて心に不快を覚え、一瞬暗鬱な
悲しみがその顔に影を落とした。しかしまた、憐憫の情もそこに
混じっており、彼ら自身の幸福まで乱されはしなかった。
これら天上の住人たちは、地上で生じた事態の一部始終をもっと
よく聞こうとして、帰還した一団のまわりに群れをなして駆けよった。
しかし、その一団の者は、何よりもまず責任上、神の王座の前に
急いで伺候し、然るべき理由を具して、極力警戒に
当たったにもかかわらずこういうことになった事情を弁明した。
そして神の承認を即座に得ることができた。いと高き永遠者なる
神は、その時、御自身の姿を濛々たる雲の中に隠し給うたまま、
雷鳴を轟かせながら、次のように大声で言われた²⁾。

それまで墮落前のわが始祖をとりなし、反逆天使たちを放逐し、世界を創造した御子は、ここでは樂園に降りて来て、罪を犯した三者に宣告を下します³⁾。この有名な場面は、聖書では夕刻の涼しい風が吹く頃となっていますが、ミルトンはこれを詩的に描写します。彼は規則的な表現を守り、アダム、イヴ、蛇のそれぞれに宣告を下します。彼はこの場面で記録にある科白から逸脱することなく、自らの持つ豊饒な詩文を無視する道を選択しました。審判者の前で裸で立っているわが始祖の罪悪感と狼狽は、とても美しく描写されています。被造物に罪と死が訪れたとき、全能の神が周りの天使たちにつぎのように語ります。

2) 『失樂園』第10巻17-33行。

3) 『失樂園』第10巻85-102行。

地獄の犬どもがかなたの世界を荒廃させ、蹂躪しようとして、
躍起になっているあの姿を見るがよい。わたしはあの世界を
美しく善き世界として創造しておいた⁴⁾、

つぎの一節は、ハレルヤを叫ぶ大群衆の天使たちの声を激しい雷鳴、多くの水の音にたとえる聖書の荘厳なイメージをベースにしています⁵⁾。

神がそう語り終えられると、天使たちは一斉に声高らかに
ハレルヤを歌った。歌声はその大群衆の間にあたかも
大海の怒濤のようにどよめいた。「主よ、汝の御意思は正しく、
すべての造られしものにたいする汝の審判は義し。おお、主よ、
誰かよく汝を軽んじえんや?⁶⁾

ミルトンは、全編を通じて、とくに第10巻では、数え切れないほど聖書に言及していますが、私は詩的で、本文の流れと見事に調和している点だけに注意を向けます。その一つとして、被造物に罪が忍び込んで行く箇所が上げられます。ミルトンはつぎのように付け加えます。

「死」も彼女のうしろに踵を接するようにして

続いていたが、まだ蒼ざめた馬には乗ってはいなかった⁷⁾。

聖書の一節を引き合いに出すこの箇所は、実に詩的で、同時に、想像力に見事に訴えかけるものです。「そこで見てみると、見よ、青白い馬が出てきた。そしてそれに乗っている者の名は「死」と言い、それに黄泉が従っていた。彼らには、地の四分の一を支配する権威、および、つるぎと、ききんと、死と、地の獣らとによって人を殺す権威とが、与えられた」⁸⁾。この最初の天界の人々の項ではまた、自然にさまざまな変化を齎し、創造の美を汚させるために天使たちに発した命令を無視するわけにはいきません⁹⁾。この命令によって、星や天体は悪い影響力を持つようになり、太陽の光は弱まり、穏やかな気候の地に冬を齎し、空に風と嵐を準備させ、雲には雷を蓄えさせ、要するに、宇宙のすべての枠組みを犯罪者の住人の条件に合わせたのです。天使たちが地球を持ち上げ、人間が墮落する以前とは違った姿にさせるつぎの詩行は気高い出来事なのですが、偉大な著者固有の崇高な想像力でもって生み出されています。

或る人々の説によれば、神は天使たちに地球の両極を黄道の
軸から二十度余り傾けるようにと命じ給うた、そこで彼らは
全力をふり絞ってこの地球を斜めに押しやった、という¹⁰⁾。

4) 『失樂園』第10巻616-18行。

5) 『ヨハネの黙示録』第19章第6節。

6) 『失樂園』第10巻641-5行。

7) 『失樂園』第10巻588-90行。

8) 『ヨハネの黙示録』第6章第8節。

9) 『失樂園』第10巻649-67行。

10) 『失樂園』第10巻668-71行。

つぎに、ミルトンが第10巻で描写する地獄の行為者について考察します。ウェルギリウスには壮大な意図があったと述べている人々によると、ミルトンはその当時分かっていた地球の各地に読者を導いているとのこと。アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地が登場します。ミルトンの詩の企画は限りなく広大で、数多くの驚くべき出来事が描かれます。7回地球を駆け巡ったサタンは、ついには楽園から出て行きます¹¹⁾。サタンは、さまざまな星座の間を駆け巡り、そこを横断したのち、混沌の旅を続け、黄泉の国に入っていきます¹²⁾。

サタンが、集まった墮天使たちの前に初めて姿を見せたときの様子は、読者に愉快的驚きを与える出来事となります¹³⁾。首領が墮天使たちに冒険談を語ったときに生じる彼らの変化ほど驚くべき出来事は全編を通じてほかには見当たりません¹⁴⁾。サタン自身が徐々に変化していくさまは、オウィディウスの手法に似ており、彼の作品の最も美しい箇所と考えられている名高い変身のひとつとみなすことができます。ミルトンは、必ず自らの思いつきに手を加え、詩に登場させる出来事にはすべて仕上げの一筆を入れます。ここで湧き上がる予期せぬシューシューという非難の声、同じように変身する地獄の精霊たちの中にあって、年に一度巨大な蛇の姿に変化させられることになるサタンの変身などは、この種の具体例です¹⁵⁾。この場面の表現の美しさは、すでに、第285号で述べたように、とても際立ったものとなっています。

つぎに、アダムとイヴ、つまり、人間について考えます。わが始祖を導き出すミルトンの手法も他に類を見ません。ミルトンの彼らの描写には、嘘偽りがなく、読者に憐憫と同情を喚起させるように巧みに工夫されています。アダムはあらゆる種を不幸に巻き込むのですが、彼の罪はあらゆる人間が許し同情したくなる弱さに起因しているのです。これは罪を犯した当人の弱さというよりはむしろ人間性そのものが持つ弱さと考えられます。イヴへの過剰な愛が、アダムとイヴの幸福を台無しにしたのです。付け加える必要はありませんが、この点に関しては多くの先人や正統派の著述家たちが、ミルトンの弁護をしています。ミルトンは彼の詩に、フランスの批評家たちの言う「愛情」を注ぎ込んでいるのです。これによって、あらゆる読者を引き付けることになっているわけです。

第10巻におけるアダムとイヴもまた、悩み苦しんでいる読者の関心を引くだけでなく、非常に感動的な人間性と同情を喚起させる心情を込めて描かれます。アダムが身の回りで起こる自然の変化を目にするとき、無垢と幸福を剥奪された人物にふさわしく心を乱しています。彼の心には、恐怖、悔恨、絶望が宿ります。苦悩に包まれた彼は、頼んでもいない生をもたらししたことに対して、創造主に異議を唱えます。

おお、創造主よ、土塊つくりぬしから人間を造っていただきたいと、

11) 『失樂園』第9巻63-69行。

12) 『失樂園』第10巻325-49行、414-20行。

13) 『失樂園』第10巻441-59行。

14) 『失樂園』第10巻504-47行。

15) 『失樂園』第10巻575-7行。

私があなさに頼んだことがあったでしょうか？
暗闇の世界から私を導き出していただきたい、この楽しい園に
住まわせていただきたいと、懇願したことが果たしてあったでしょうか？
私は自分が生まれてくることに同意しなかったのです、ですから
主が私を元の塵に戻されることも全く正しく当然なことだと
思っております。……私は自分の持っている一切を今放棄し、
元に返したいのです¹⁶⁾。

この直後、アダムは気を取り直し、自らの宿命を当然だと認め、彼を脅かす死を懇願します。

ああ、とにかく早くその時が来ないものか！ それにしても、
神が今日だと宣告された事を、なぜその御手は遅々として実行しないのか？
なぜ私は依然として生きのび、なぜ死の嘲笑に晒され、
死に絶えることのない苦悩にいつまでも苛まなければならないのか！
私はあの宣告された死を一刻も早く迎え、冷い土塊になりたい！
母の膝に抱かれるように、この体を地中に横たえたい！
恐らくそこには平安と静かな眠りがあるはずだ。
もっともっと悲惨なことが自分に、そして自分の子孫に起こる
かもしれないという残酷な不安に苛まれることもないはずだ¹⁷⁾。

上記のアダムの発言には、同種の情感が込められおり、打ちひしがれ、混乱した人物に当然と思われる気持ちが添えられています。子孫に寄せるわが始祖の寛大な心遣いを無視するわけにはいきません。これによって読者は心を大きく動かされることになります。

私は今祝福の生涯から一転して呪詛^{のろい}の身となり、かつては
神の御顔を拝することこそこの上ない幸福と感じていたのに、
今ではその御顔を避けようとしている。だが、もしここで
この惨さが終るものならどれほど有難いことか！
私はこの惨さを当然招くようなことをしたし、その重荷を
自ら背負う覚悟はできている。だが、それだけではすまないのだ。
私の食うもの飲むもの、私から生まれてくる者、それらすべてが
果てしなく呪詛^{のろい}の対象となってゆく。ああ、『生めよ繁殖よ』という
あの御声を、かつてはなんという喜びをもって聞いたことか！
だが、今では聞くだけで死ぬ思いがする！¹⁸⁾

……

私を通じて子孫のすべてが呪われている。ああ、後に来るわが子らよ、
私はなんという見事な財産をお前たちに残すことか！

16) 『失樂園』第10巻743-50行。

17) 『失樂園』第10巻771-82行。

18) 『失樂園』第10巻723-31行。

できれば、私は自分一人でこの財産を使い果たし、お前たちに
 何一つ残したくない！　そうやって遺産が貰えなければそれだけ
 お前たちはこの私を、呪うどころかむしろ祝福してくれよう！
 ああ、なぜ、一人の人間の咎のために、咎を犯さなかった全人類が
 （咎を犯さなかったとしての話だが）かくも罰せられなければ
 ならぬのか？　いや、やはり、私から生まれる者はすべて
 腐敗しているのだ¹⁹⁾、……

その後のわが始祖が地面に体を投げ出し、夜中に不満を訴え、生まれて来たことを嘆き
 悲しみ、死を願っている様子を目にする人は誰でも、彼の悲嘆に同情せざるを得ません。

アダムはこんな風に、夜の静寂を破る悲痛な声をあげて
 嘆き悲しんだ。夜ももはや人間が墮落する以前の夜のように
 健やかで穏やかで涼しいものではなくて、今では黒々とした
 空気と湿気と恐ろしい闇に包まれていた。そのために、罪に
 悩む彼の良心には、あらゆるものが二倍にも三倍にも恐ろしいものに
 映った。彼は地面に体を投げ出して横たわった。冷たい地面であった。
 なん度も自分が造られたことを呪い、なん度も「死」を非難した、
 罪を犯したその日に宣告されていたのに未だにその執行が
 遅れているのはなぜなのか、と²⁰⁾。

第10巻におけるイヴも同様に情熱的に描かれており、読者は彼女に心を動かされます。
 彼女は溢れんばかりの優しさをたたえて、アダムに近づいて行きますが、今ではその情熱
 の虜になっていた人物にふさわしい非難と憤怒に駆られたアダムから拒絶されます²¹⁾。つ
 ぎの一節は、再度彼に言い寄る場面ですが、実に感動的で痛ましいものです。

アダムはこれ以上一言も言わず、黙ってイーヴから顔をそむけた。
 だが、彼女はそれに怯まず、とめどなく溢れる涙を拭おうとせず、
 髪をふり乱したままアダムの足もとに身を投げ出して、
 その足を両腕でかき抱きながら、彼の許しを求めた。
 そして、次のように自分の苦衷を訴えた。

「アダムよ、そんな風に私を見限るのはやめて下さい！
 おお、天も照覧あれ、私がどれほど強い愛情と尊敬の念を
 あなたに対して抱いているのかを！　そしてまた、私が不幸にも
 騙されて不用意にも罪を犯してしまったことを！　私は今一人の
 哀願者としてひたすらあなたの情^{なさけ}に縋り、あなたの膝を抱いて
 お願いします。どうか、私の生命の糧であるあなたの優しい顔を、
 援助の手を、この苦しい悩みに際しての忠告を、私のただ一つの

19) 『失樂園』第10巻817-25行。

20) 『失樂園』第10巻845-53行。

21) 『失樂園』第10巻863-908行。

力と支えとを、私から取り去らないで下さい。

あなたに棄てられたら、私はどこへ行き、どこで生きてゆけばよいのでしょうか。私たちは、生きている間は、一ひとときといっても僅か一刻にもみたくないでしょうが—二人で平和に暮らそうではありませんか²²⁾。

アダムとイヴとの和解には優しさがみなぎります。その後、絶望に駆られたイヴは、アダムに、幸福から身を落とした罪に対処するために、子供のないまま生きて行こうと、それが不可能なら、こちらから激しく死を探し求めよう、と提案します²³⁾。こういった感情は、当然、読者にたんなる同情を超えた感情で持ってわが母を見つめさせることになります。同時に、実に素晴らしい道徳観念が込められた感情となっています。だが、私たちの悲慘に終止符を打つために死ぬのだという決意は、悲慘に耐え、神の摂理に委ねるのだという決意と考えられるほどの雅量は示されていません。そのため、ミルトンはとても巧みに、イヴはこの思いを抱き、アダムがそれに不賛成だと描写しています。

最後に、第10巻で大きな役割を演じる架空の人物、つまり、「死」と「罪」について考察します²⁴⁾。美しく広範なこういった寓話は、確かに、天才が作り出す見事なものなのですが、私が以前に述べたように、英雄詩の性格に似つかわしくありません。こういった作品の一部として考えなければ、この「死」と「罪」の寓話はそれ自体は申し分ありません。ここに込められている真実は明白なものですので、ここで説明を加えることはいたしません。一言だけ、英語という言語の力をご存知の読者は、ミルトンがこの架空の人物の行為、とりわけ、「死」が「混沌」にかかる橋となっているのだという箇所を描写するために、実に適切な単語や言い回しを用いているのを知って驚かれるに違いありませんとだけ付け加えておきたいと思います²⁵⁾。ミルトンの才能にふさわしいものとなっているのです。

このテーマについて考えていますと、実体の伴わない架空の人物について詳細に語りたくなりましたので、興味深く、批評家の誰も扱っていない事柄について述べてみようと思います。ホメロスとウェルギリウスには確かにこの種の架空の人物がふんだんに登場するのです。彼らの場合、架空の人物は一連の行為とは無関係に、見事に描かれています。実際、ホメロスは「睡眠」を人物として描き、『イーリアス』の中でちょっとした役割を与えています。私たちがからすると、こういった人物をもっぱら実体の伴わない人物としか考えられませんが²⁶⁾、異教徒たちは彼の像をこしらえ、神殿に置き、本物の神と考えたのだと考えなくてはなりません。ホメロスがこの種の寓意的な人物を持ち出すときには、さりげなく登場させるだけで、とても心地よいものとなっており、寓意的な描写というより

22) 『失樂園』第10巻909-24行。

23) 『失樂園』第10巻979-1006行。

24) アディソンはここで第273号、297号、309号、313号で簡単に触れていた欠陥について少し詳しく触れている。

25) 『失樂園』第10巻282-324行。

26) 『イーリアス』14.231-91

はむしろ、詩的な言い回しとみなすことができます²⁷⁾。ホメロスは、人間がおびえて逃げ出すとは語らずに、「潰走」と「恐怖」という人物を登場させ、彼らは離れることのできない仲間だと描写します²⁸⁾。また、アポロンが報酬を受け取るときが来たと言わずに、彼は「季節のめぐり」が駄賃を払ったと描写します²⁹⁾。戦いにおけるミネルウァの楯の効果を描写せずに、彼は楯の縁は「恐怖」「敗走」「争い」「憤怒」「追跡」「虐殺」そして「死」が取り巻いたと描写します³⁰⁾。同様に、彼は「勝利」はディオメデスに従うと語ります³¹⁾。「争い」は葬儀および哀悼の母として³²⁾、ヴィーナスは三美女神が付き従い、ペローナは恐怖と狼狽の衣服を身につけます³³⁾。ホメロスからそのほかにもいくつか事例を引けますが、ウェルギリウスからも同様にこういった事例は枚挙にいとまはありません³⁴⁾。同様に、ミルトンもまた同じような描写をします。反逆天使たちに向かって軍を進めるとき³⁵⁾、救世主の右手には「勝利」が陣取り、太陽が昇るとき、「時刻」が光の門を開け³⁶⁾、「争い」は「罪」の娘だ³⁷⁾とミルトンは語ります。同様に、夜鳴鶯の鳴声について、「静寂が聞き惚れた」³⁸⁾との表現を用いています。救世主が「混沌」に命じると、「混乱」が神の御声を聞いて鎮まったとのこと³⁹⁾。ミルトンについても、こういった美しい人物については、枚挙にいとまはありません。明らかに、私が取り上げています架空の人物についてはきわめて簡潔な寓意となっており、文字通りの意味で解釈されないように意図されたもので、読者に珍しく興味深い状況を伝えるのに役立っています。ところで、こういった架空の人物が主役を演じ、一連の冒険に関与するとなりますと、どう見ても、確かなものが中心的な役割を果たすべき英雄詩にとってはふさわしいものとは言えません。それゆえ、私は、アイスキュロスの悲劇において、「力」と「必然」がそうであるように⁴⁰⁾、「罪」と「死」はこの種の作品では不適切な代理人だと考えるわけです。アイスキュロスによると、この「力」と「必然」がプロメテウスを岩山に縛りつけたとのこと⁴¹⁾。このため、アイスキュロスは優れた批評家たちから非難されることになったのです⁴¹⁾。私としては、架空

27) ル・ボッシュ、第5巻第4章。

28) 『イーリアス』9.1-3

29) 『イーリアス』21.450

30) 『イーリアス』5.738-42

31) これはホメロスではなく、アディソンは『イーリアス』5.835-41を念頭に置いていたのかもしれない。

32) 『イーリアス』4.440, 11.73

33) 『イーリアス』5.338

34) デニス、『アーサー王について』(1696)。

35) 『失樂園』第6巻762行。

36) 『失樂園』第6巻4行。

37) 『失樂園』第10巻707-8行。

38) 『失樂園』第9巻604行。

39) 『失樂園』第3巻710行。

40) アイスキュロス『縛られたプロメテウス』。

41) アリストテレス『詩学』14。

の人物の用い方に関しては、預言者の一人が、神が天国から降りて来て、人間の罪を見、「疫病がその前に行った」⁴²⁾と語るときの用い方ほど崇高なものはないものと思います。明らかに、この架空の人物の全身は紫色の斑点に覆われていたに違いありません。「熱」がその前を歩き、「苦痛」が右手に、「発作」が左手に陣取り、「死」がその背後に潜んでいたものと思われます。「疫病」は彗星の尾からすべるようにして、稲妻のごとく地球に向かって突進したのかもしれませんが。また、「疫病」は自らの息で大気を腐らせ、ぎらぎら光る彼女の眼光は伝染病を撒き散らしていたものと思われます。読者は「疫病」がこのように崇高な文書で描かれますと、奇想を凝らした詩人が想像力の豊かさを示すために生み出したあらゆるものよりも、ごく当然で卓越したものと考え私は思います。

第358号 1712年4月21日（月曜日）

【スティール】

しかるべき場所で愚かな振舞いをする。(ホラティウス)¹⁾

先日、チャールズ・リリーに会いましたが、彼からモザイク模様状の敷石を描いた大きな紙を渡されました。それは最近ウッドストック近くのストーンズフィールドで発見されたものでした²⁾。リリー氏には話術の才能があり、返事をしなくても会話が成り立ちますので、私は立派な遺跡について詳細にお話を聞くことができました。中でも、私は装飾品についての彼の意見を記憶しています。この敷石は陽気と調和をもたらすために作られた部屋の床だということでした。これを見ていて、私は古代の作家たちの作品で読んだことがある陽気な表現に思いを馳せました。その中には、不安や心配事を忘れ、仕事を忘れ、心から楽しむ招待があります。この時間は通常そのための飾り付けをした部屋の中で過ごしますし、部屋全体は人々の心を楽しくさせるようにしつらえられます。こういった飾り付けが、選び抜かれた、感じのよい友人たちの機嫌のよい表情とあいまって、その場に新たなエネルギーを生み出し、慎み深い人々には潜在的な情熱を、尻込みをする控え目な人々には気品を与えるのです。思慮深い人たちの集まりは花冠を載せ、部屋全体は皓々と照らし出され、たくさんの薔薇の花と人口の滝に囲まれ、柔らかな愛と酒の調べが流れ、人生の憂さは見合わされ、互いに優しく振る舞う饗宴となるのです。こういった愉快的パーティ、そしてそこで交わされる楽しい会話は、いつの時代にあっても、気乗りのしない人々を覚醒させて、陽気で上機嫌にさせてきたのです。なぜなら、誰もが分別を持って一夜を共にし、ほかの人々にショックを与えず、自分を買いかぶらず、全員が等しく喜びを分かち合うことができるからです。過去および現在のそういったパーティについて考

42) 『ハバクク書』第3章第5節。

1) ホラティウス『頌詩』4.12.28

2) この敷石は、1月に、オックスフォードシャー、ウッドストック近郊のストーンズフィールドで発見された。好古家・歴史家のトマス・ハーン（1678-1735）は、ワレンティヌアス1世時代のものと推定した。

えて見ますと、人々は、浮かれ騒ぐ人たちに対して一様に不機嫌になっていることが分かります。ここに寄稿者からの一通の手紙がありますが、その人は私に、悪ふざけをし、軽薄で、鈍感な、いわゆる浮かれ騒ぐのは間違いだと声を大にして警告を発して欲しいとのことです。無作法そのものは喜びや陽気さを引き起こすことはできません。人の集まりの中にあってルールと品位をわきまえている人こそが好ましい人物と呼べるのです。そうではなく、現実には、内心ひそかに、自分たちは世間のことが分かっているのだと思って、似つかわしくない言動をして陽気さを振りまく人たちが大勢います。こういった人たちには、常に、茶目っ気が付け加わるものです。数名のとても愉快的な人たちの集まりで、浮かれ騒ぐ人はまず歯を1本引き抜くべきだとがなり、そうした後、一団になって靴屋をひやかしに行ったという話を聞いたことがあります。この一団は、別の夜には、各人が首巻を火にくべ、ある人物は、それだけの資産家なのですが、長い鬘とレースの縁取りのある帽子を同様に火の中にくべたのです。こうして、彼らはとことん茶化して、町に出かけて行き、女性陣をぎょっとさせるのに成功したとのことです³⁾。コヴェントガーデンにはこれといった人物はいませんが、流血の惨事には至らず、一晚愉快に過ごせる快活についてはいくらでも取り上げることができます。私は夜警の警棒で殴られ、頭に数箇所傷を受け、戯れを実行するために、三度体を刺されたことがある紳士を知っています。彼は今日まで浮かれ騒ぐことはめったにないのですが、時と場合によっては勇敢になるのです。こういった紳士に乗じて、私は人はとても機知に富んでいて、刺傷事件も例外ではなく、わが国の規則に違反しない人物になることができるものと思います。

劇作家は、作品に妥当性を付与するために、いわゆる三統一の法則を守ります。そこで、仲間だと自負する人たちが自分たちの活動を会合の場所に制限したとしても間違いにはならないでしょう。過度のふざけは、人間以外の動物にふさわしいものとなります。愉快的な奴と呼ぶには、根拠と茶目っ気をなくさないことですが、真の陽気さは気晴らしとなり、さまざまな無理のない想像力のほとばしりから成り立っています。お祭り気分というものは非凡な才能であり、当人の心地のよい資質の集合体から生まれなくてはなりません。私が思いますに、この才能に恵まれている人はまれです。これが品がなく、不自然だと思われる場合には、人間に備わっている才能とは言えません。仲間の賑やかさを高揚させることに関して、私が承知しているお手本となる人物はエストコートです⁴⁾。彼の愉快的な気質は最も高尚な人物から最も卑小なウェイターに至るまで見事に発揮されます。陽気なお話は、適切な身振りと状況と人物に対する活発な表現を伴って、くそ真面目な人物を騙して彼と同じ心境にさせてしまいます。さらに付け加えますと、人に気に入られますと、物まねはその人の品位を落とすことにはならず、真面目に行うことで、心地よさが加わります。この愉快的な人物を見ていると、古代のパントマイムについて考えさせられます。古代のパントマイムは、性格とか感情、あるいは出来事を観客に理解させるために、表情と身振

3) 宮廷詩人であり、放蕩で知られたサー・チャールズ・セドリー（1639-1701）の友人たちの間では歯を1本抜いたり、レースの首飾りを燃やしたりしたとのこと。

4) 第264号参照。

りだけの無言劇の形で伝えたとのことです⁵⁾。エストコート の才能に感謝しており、明日の夜の『愛には愛を』⁶⁾ をご覧になられる方は、きっとこのことがお分かりになられるに違いありません。

第359号 1712年4月22日(火曜日)

【バジエル】

オオカミは貪欲な雌ライオンを追い求め、
子オオカミはみだらな子ヤギを追い求める。(ウエルギリウス)¹⁾

昨夜のクラブでは、わが友サー・ロジャーは、いつもと違って、沈黙を守り、人の声を気に掛けずに、一人で口笛を吹きながら物思いに耽り、コルクを弄んでいるのに気づきました。私はそばにいたサー・アンドリュー・フリーポートを突き、二人で彼を観察していますと、勲爵士が首を振り、「愚かな女め、考えられない」とひとり言を言うのでした。サー・アンドリューが勲爵士の肩をポンと叩き、寡婦の思いを馳せているのだねとワインを1本差し出しました。わが旧友ははっと驚き、不機嫌な状態から蘇り、サー・アンドリューに向かって、とにかく自分に分があったのだと言いました。手短かに言うと、サー・ロジャーはほんの少々口ごもった後で、気持ちを込めてつぎのように語りました。自分は執事から田舎での旧敵サー・デイヴィッド・ダンドラムが寡婦を訪問していたのだとの手紙を受け取ったところだとのことでした。サー・ロジャーが言うには、彼女が自分よりも六ヶ月年長であり、おまけに名うての共和制支持者を受け入れるなんて考えられないとのことでした。

色恋沙汰を得意分野と考えているウィル・ハニコームは、自信に満ちた笑みを浮かべてわが友の話の腰を折るのです。貴方はたった一人の女に貴方の幸せを賭けるほどの年齢ではないと言うのです。私の知識の主要な部分はこれで成り立っているのだが、自慢ではないが、女性の世界のことはわが国の誰よりも分かっていると言えると思うとのことでした。ウィルはそう言うや否や、いつものように流暢に自分自身の色恋沙汰について喋りだしました。彼が60歳になっているのは私たちは誰もが知っているのですが、彼は今自分は50歳にさしかかろうとしているのだと言います。みなさんお分かりのように、私はこの歳まで生きて来ましたが、一度もこれでいいと思ったことはないのです。実を言うと、自慢できるほどのことはないのですが、幾度となく運試しをして来たのです、と彼は続けるのでした。

最初に女性に言い寄ったときのことで、九分九厘うまく行くと思ったその矢先に、私が以前にある外科医の家に下宿していたことがあるとの噂を偶然耳にした木偶の坊²⁾ の

5) ローマの黙劇で、擬態によってさまざまな性格や場面を表現した。

6) ウィリアム・コングリーヴ『愛には愛を』(1695)。

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』2.63-64

2) 木偶の坊の原文は Put で、当時この言葉が流行した。

彼女の父親が私の家への出入りを禁止し、2週間も経たない内に、娘を近所の狐狩りと結婚させたのです。

つぎに言い寄ったのは寡婦でした。私はとても活発に攻撃しましたので、2週間以内に彼女を仕留めることができると思いました。ある朝彼女を訪問しますと、彼女は即金と寡婦資産は自分で管理する積もりなので、私にライオンズ・イン³⁾の弁護士のところへ出向いて、話をつけて来て欲しいと言いました。私はこの申し入れに呆れて、その後彼女も彼女の弁護士にも会いに行きませんでした。

その2、3ヶ月後、良家の一人娘に言い寄りました。舞踏会では何回か彼女と踊り、彼女を手を強く握りしめ、彼女に甘い言葉を掛けました。要するに、彼女の心に疑いを差し挟まなかったのです。私の資産は彼女と釣り合いが取れなかったのですが、娘に甘い父親は娘が決めた男を拒否しないだろうと期待しました。ところが、ある日、事情を説明するために彼女の家を訪ねますと、家中狼狽しており、ジェニー嬢がその朝、執事と駆け落ちしたことを知らされたのです。

つぎに言い寄ったのも寡婦でした。彼女を手に入れることができなかったことを思うと、今でも途方に暮れます。なぜなら、彼女はいつも私の人柄と振舞いを誉めてくれていたのですから。実際、ある日のこと、彼女のお手伝いさんが、ご主人はハニコームさんほど素敵なおみ足の紳士に出会ったことはないとおっしゃっておられたと教えてくれたのです。

その後、連続して4名の女子相続人に言い寄りました。当時は見栄えのよい若者でしたので、彼女たちの心に入り込むのはわけのないことでした。娘たちの同意はほぼ得られたのですが、どういうわけか、お年寄りを味方につけることができなかったのです。

その他不首尾に終わった例は枚挙にいとまがありません。中でも、ある老婦人に数年言い寄ったことがあります。もし彼女の親族がイングランド各地から殺到してきて彼女の応援をしなかったら、私はきっと大勝利にわれを忘れていたに違いありません。いやむしろ、冷酷無比な男にさらわれなかったら、最終的に彼女を獲得したのは私だったのです。

ウィルはいとも素早く心変わりしますので、サー・ロジャーのことは忘れて、自分のことに引きつけ、私に向かって、先週土曜日の『失樂園』第10巻には強調すべき一節があるねと言い、ポケット版のミルトン⁴⁾を取り出し、墮落した後、アダムがイヴに語った言葉の一部であるつぎの詩行を読み上げました。

創造主なる神は賢明にも天国を男性の天使たちで充たされたのに、
なぜ最後になってこの新奇な生きもの、この自然の美しい汚点、
をこの地上で造られたのか？ なぜ女性を除いた、天使のような
男性だけでこの世界を一挙に充たすか、人類の繁殖のための
何か他の方法を見つけようとされなかったのであろうか？
もしそういうことが可能であったとしたら、こんどの禍は

3) ライオンズ・インは、イナートンプル法曹学院の一つ。1700年に新築のホールが完成したが、1868年に取り壊された。

4) エルゼヴィル活字体で出版されたポケット版の『失樂園』のことで、12巻あった。

生じなかったろう、いや今後も生じないはずだ。女のかける罠のために生じ、女という性をもった者とののっぴきならぬ関係から生ずる無数の紛争^{もめごと}も起らないはずだ。男がせっかく適当な配偶者を見出したと思っても、その相手がなんらかの不幸か失態を齎らすということも多い。こちらが心から望んでいても相手の依怙地のために結婚できず、しかも自分よりもっとつまらない男のものとなるということも、或は相手が自分を愛しているのにその親達の反対のために結婚できないということもあろう。時にはこれこそ願ってもない配偶者だと思ふ女にめぐり逢^{かたき}っても手遅れで既に自分が、見るのも嫌で恥ずかしい、まるで仇のような女と夫婦の絆に縛られている、ということもあろう。こういったことが、人間生活に無限の禍を齎らし、家庭の平和を乱すことになるのだ⁵⁾。

サー・ロジャーはとても熱心にこれに耳を傾けました。勲爵士は、ハニコームにそこで本を閉じ、貸して欲しいと頼みました。彼はその本をポケットにしまい、寝る前にまた読んでみると言うのでした。

第360号 1712年4月23日（水曜日）

【スティール】

口数が少なく、欲求を口にしない人は、
大きな不満を抱えてしまう。(ホラティウス)¹⁾

本日の紙面の冒頭には、ラテン語の一文を掲げるのが最適と考えます。貧困を口にしないことは好ましいことですし、きちんとした服装で慎みを隠すことはそれ以上にあつぱれなことです。これをモットーに据えるのがふさわしいと考えた次第です。

観察者殿

この世には、貴殿がまだ思索の対象としておられない悪が存在しています。それは非難、軽視、軽蔑のことです。これは若者たちがある特定の人物から受けるものであり、若者たちは一般にそれを避けるために分別をわきまえた方法を駆使します。この一つに、分不相応な身なりをすることがあります。こうすることで、他の点でもそれ相応の贅沢をしていると思わせることが可能です。貧しい人たちの言動が不利になることは、『クリスチャン・ヒーロー』²⁾ という小冊子に実感を込めて述べられていますので、貧しく見えない恰好をすることは、容赦できるだけでなく必要なことなのです。悲惨に見える人物は、いとも簡単に軽蔑の対象となることは周知の事実です。階級も資産も勝っている人たちの仲間入りをするには、見苦しくしない限り、立派な身なりにするのは許されることです。

5) 『失樂園』第10巻888-908行。

1) ホラティウス『書簡詩』1.17。43-44

2) スティールはこの冊子の3章冒頭でこの旨を記した。

誰か特定の人物から厳しく非難される人は、当然のように、時間の使い方に気を配ることになります。そして、自室で過ごす時間が多くなるのです。この問題が解決しますと、貧困に苦しむ分別をわきまえた人が、この蟄居を最大限に利用しないとすると、その結末はとても情け容赦のないものとなってしまいます。そこで、私は、若者は目上の人と知り合いになるには、勉強にかけるよりも多くの時間と、自分の資力以上のお金を使ってもらいたいと考えます。これはすべて実体を伴ったものを獲得することになるのです。取り返しのつかないその時々、自分が心から無理をしていないと信じなくてはなりません。服装に関しては、私は年に2着の地味なスーツで控え目にしておきたいと思います。レースと刺繍入りのスーツを着てモーホックの仲間入りをしようとするユートラペラスの企みに満足して、気障の強みをあてこすって、慢心を論駁していると思われたくないからです。紳士の身なりをしたまですのセンスの見知らぬ人の方が、つましい身なりをした立派な人物よりも目上の人に受け入れられるのは立証されているところです。外見は、誰からも非難の対象とされます。資質や学問が対象とされることはごく稀です。この資質や学問も、知恵や育ちの良さによって、見知らぬ人の中では留保しておくようにと教えられていますので、最初は持ち込むことは出来ず、援護射撃をしてくれるのは、ありふれた会話しかありません。実際、無分別な人たちの間では、つましく上品で厳粛に発揮される言葉の優美さ、イディオム、優れたイメージ、名調子、天分、靈感などは、その人物に膨大な読書量と深遠な批評力があることを示してくれます。

少なくとも若年層と中年層の資産家たちは、少々服装を自慢しがちになります。その結果、それと同じ尺度で他人を値踏みする傾向があります。名士が雰囲気や服装がまったくその資格のない人物に答礼をしなければならないとなると大変困惑します。それでも、相手方はこんな風に入前で試されることに恥じらいを覚えますが、ある種の評価をすることになります。立派な身なりをする若者が、喪服にきめの細かいホランド（綿布）ではなく粗い麻木綿を使用し、他の点では釣り合いの取れたみすぼらしい恰好をして、年に10ポンド浮かすのは許されてしかるべきです。この額では、少数の知人に見捨てられ、別の知人を獲得することにはなりませんが、不幸を避けるのに大いに役立つことになります。一財産作るためには裕福な身なりをすることが欠かせませんので、これによって、銀行株について感嘆の声を上げるのに役立ちます。そして、株の高騰は言うに及ばず、下落に驚きの声を上げることになります。尊敬の念というものは、いつの時代にあっても、外見に向けられてきました。これは商人にも当てはまります。彼らは、優秀な職人にその看板や店に巧みな装飾を施させて人々を引きつけようとするのです。著述家にとっても、巧みな書籍商が、画家と協力して店の柱などに施す時代や言語に対する素晴らしい博識ほど魅力的なものはありません。外見の素晴らしさを維持しようとするこの精神は、威厳に満ちた法曹界の実習生たちの間にも行き渡っています（ここで私の言っている実習生という言葉は、法廷弁護士のことなのですが）。したがって、白く飾り立てた窓枠を見れば、それが最近売り出し中であることが誰にでも簡単に分かるのです。実際、執務室が1階で、その前が法廷で、必要な装飾が施されていると、盛業が保証されます。また、わが国の判事や貴族

や主教が公式の場で制服につける大層な飾り物ほど服装に威厳を添えるものは他には見当たりません。これは身分の威厳を保つために欠かせないものと言えるかもしれませんが、現在の地位に就くまでは、聡明な人はとても身なりのよい人として際立っていたのです。私自身のことを言いますと、私はもうすぐ30歳になるところです。学校を卒業して以来、怠けたこともなく、刻苦勉励に努めてきました。大学では道德哲学の体系と形而上学を修めました。その後、教授に譲り伝えられている複雑な法の体系の修得に努めて来ました。私はこれに全霊を打ち込んでいますが、合間には、古典の勉強もして来ました。私はシェイクスピアの言う「名声も希望もたぬ一介の野人」³⁾ なのですが、単に職業の力だけで友人や財産を得るという決まりきったやり方ではその可能性は低く不確かなものですので、立派な知人を増やして、「すべての人に臨むところは、みな同様である」⁴⁾ といわれる機会を獲得すべきだということ思い知らされているわけです。

第361号 1712年4月24日（木曜日）

【アディソン】

この響きで、隅々まで森が震撼とした。

木々の茂みが奥深くまで反響した。(ウェルギリウス)¹⁾

最近、地方の紳士からつぎの手紙を頂きました。

観察者殿

ロンドンを発つ前日の夜、『おどけた中尉』²⁾ を観に行きました。幕が上がったとき、一斉に口笛が吹き鳴らされ、私は非常に驚きました。そして、劇場に来たのは間違いで、音楽会に行くべきだったのではないかと考え始めたのです。実のところ、男女共、これだけ多くの上流階級の人々が一斉に口笛を吹いているのを目にするのは、私にとっては少々奇異に思えました。なぜなら、口笛を吹いた人々の考えは別にして、私はとても良い上演だと考えているからです。私にはその劇場には質問の出来る知人は誰一人いなく、翌朝早く発たざるを得ませんでしたので、この一件の謎は解けないままです。そこで、皆さんがネコの鳴声というこの奇妙な楽器について、貴方に説明をして頂きたいと考えた次第です。特に、これは最近イタリアからやって来た調べであるのかどうか教えて頂きたいものと思います。私はどうかと言いますと、率直に言えば、わが国のヴァイオリンの音を聴きたいものです。劇場にいる間は、すぐ隣の人が口笛を吹いていましたが、不快感を表明する勇気がなかったのです。

敬具

3) 『ヘンリー4世』第1部、3幕2場45行。

4) 『伝道の書』第9章第2節。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』7、514-15

2) ボーモントとフレッチャーの合作で、初演は1619年頃。この年の4月3日に、ドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

郷士ジョン・シャロー

郷士シャロー氏の要請に従って、本日の紙面は「ネコの鳴き声（口笛）」³⁾について論じることになります。これに熟達するために、私は先週初めに、やっとのことで演奏者たちが買い占めた玩具屋を1, 2軒あたって、1本購入しました。その後、原型に関して造詣の深い多くの骨董商に意見を求めた結果、意見がまちまちであることが分かっています。音楽の数理的な点に堪能な王立協会の会員である私の親友によると、作りの単純さと音の統一性から、口笛はユバルが考案したものよりも古いということです⁴⁾。彼によると、楽器は鳥や声の美しい動物の鳴き声にその起源があるとのこと。人類の初期に、ごく自然に同じ屋根の下に暮らしていたネコの声を真似するようになったとのこと。彼が言うには、他の動物に比して、ハーモニーに貢献する度合いはネコに軍配が上とのこと。この吹奏楽器だけでなく弦楽器全般にも、私たちはネコに恩義があるという訳です。

私の知人の別の大家は、口笛はテスピス⁵⁾よりも古くはなく、これが登場したのは古代喜劇が発生した直後だろうと言います。そのために、これが依然として、芝居に居場所を確保しているのです。私としては、最近旅から帰って来たとても好奇心旺盛な紳士の言を無視するわけには行きません。彼の言は私たちを納得させるに十分なのですが、最近ローマでモモス⁶⁾の像が発掘され、右手に楽器を手にしており、これが今日の口笛にとっても似ているとのことでした。

これはオルフェウスの考案で、かの名高い楽人が野獣を引き寄せるために使用したのだと考える人たちがいます。時と場所を間違えずに巧みに演奏されると、この楽器ほど多くの聴衆を引きつけるものがないのは確かなところ。

ところで、こういったさまざまな造詣の深い憶測があるのですが、私は口笛は元々わが国の楽器だと考えざるを得ません。わが国固有の使用方法だけでなく、わが国の歌手の声に似ていることを考えますと、私はそのように確信するのです。楽器それ自体あるいは挿入される震音や装飾音に関わらず、少なくともこれは大きな改良を受け入れて来ました。土間席の中央に陣取り、ドルーリー・レイン座でこのほどの有名な上演で⁷⁾、他の人々を取り込んだ異常なほどの口笛を耳にした人は誰でもそのことに気づくに違いありません。

口笛の起源については以上の通りですので、つぎはその使用方法について考えます。口笛はわが国の劇場では非常に引き立ちます。これはナンセンスの騒ぎをうまく捉え、イタリアのレチタティーボ（叙唱）の伴奏をするヴァイオリンやハープシコードのように、役者の声に合わせて起こります。

3) 口笛は一種の笛で、ピープスは呼子笛を1本4ペンスで購入したと日記に記している（1659/60 3月7日）。

4) 『創世記』第4章第21節。

5) テスピスは紀元前6世紀のギリシアの詩人で、悲劇の祖と言われる。

6) モモスは非難とあざけりの神（ギリシア神話）。

7) 『悩める母』の上演を妨害したことに触れている。

これは某氏の作品では、しばしば古代の合唱隊の代わりとなっています。要するに、へば詩人は多くの人が実際のネコを嫌うように、口笛に嫌悪感を抱いているのです。

コリアー氏は、独創的な音楽論の中で、つぎのように書いています。

「私は、その効果が現在使用されている好戦的な楽器とはまったく異なる楽器を考案することが可能だと考える。気持を萎えさせ、神経をかき乱し、血を凍らせ、驚くほどの速さで、絶望と臆病と不安感を煽る楽器がある。これは恐らくライオンのうなり声とかネコやメンフクロウの鳴き声、さらには犬の鳴き声を巧みに模倣し、合成された結果なのだろう。こういった不協和音が野営地で有益なのかどうか、その判断は、軍人にお任せしたいものだ。」⁸⁾

コリアー氏の考えておられることは、実際に確証を得られているものと私は思います。口笛は将官を気落ちさせますし、勇士を脅えさせるのです。口笛は鳴り始めると、王が身震いをし、王子が発作を起すのを目にしたことがあります。おどけた中尉自身立っておられなくなりました。そうです、アルマンザーでさえもこの恐ろしい楽器の音を聞くと、ネズミのようになり、震えたとのことです⁹⁾。

口笛は芝居に特有のものであり、特に舞台にふさわしいものですので、私としてはどうしてもあの短気な愛人の思いを認めることはできません。彼は数年間追いかけたのですがうまく行かず、口笛のセレナーデが流れる中、彼女の元を離れて行ったのでした。

本日の紙面の締め括りとして、この楽器について長らく研究を続けており、ドラマのルールに精通しているある独創的な人物の説明を無視するわけにはいきません。彼によると、口笛は規則に則って演奏し、あらゆる非難を表現すべきだとのことです。彼はバスとソプラノの口笛を持っており、前者は悲劇、後者は喜劇用だとのことです。悲喜劇の場合にのみ、その双方を用いるとのことです。三統一が侵害されていることを示すためにはキーキーという音を出し、劇作家あるいは役者をにその非難を向ける場合にはそれぞれ異なった音を出すのです。要するに、彼は淫らな調べ、仰々しい調べ、愚かな調べを指導し、これを口笛の全音域の中に取り込み、救い難い芝居に対する一種の裁定となる旋律を作曲しているのです。

8) ジェレミー・コリアー (1650-1726) は、牧師で王政復古期の喜劇の不道德性を攻撃したパンフレット『イギリス演劇の不道德性と流神に関する管見』(1698)を書いた。

9) ドライデン『グラナダ征服』(1670/1671)